

白いほどボロボロと落ちた。

京城駅には夜十二時頃に着き、広い待合所のコンクリートの上に横たわって寝た。

翌朝は駅前の西本願寺別院で大きな握り飯を頂戴し、そのうまかったこと。

そして九時頃釜山行の列車に乗り、夕方釜山に到着し、博多行き<sup>の</sup>対山丸の人となり、翌朝博多に上陸した。

即日博多駅から乗車して広島駅を通過したとき、なんでも新兵器にやられたという噂通り、一面の焼野が原だった。原爆とは後で知ったことだった。

かくして元山を脱出してから、八日目の夕方郷里の土を踏んだのであった。

## 引揚げ後の苦難の道

福島県 渡 辺 一 正

私は、五歳の時、父が朝鮮釜山の警察官として勤務

のため、両親と弟一人と一緒に、大正十一年と記憶しているが、福岡県博多港から朝鮮に渡航した。

幼い時ではあったが、初めて乗る大きな客船に、嬉しい気持ちで乗りこんだ。玄海灘の荒波で船酔いし、苦しかった思い出が今でも残っている。釜山の日本人学校を卒業後、朝鮮総督府鉄道局に就職し、旅客専務車掌として、勤務していたが現地召集となり、兵役に付いた。

父は昭和十九年病気で死亡し、弟も兵隊に行き、母は一人となったが、さいわいにも私は釜山で軍隊生活を送っていたので、母の面倒は見る事が出来た。昭和二十年八月十五日、終戦となり、私達は信じられないと、意気盛んであったが状況が判るにつれ負けた悔しさで兵舎内は泣きわめき、混乱の呈であった。これからどうなるのか、日本に帰れるのか、日本に帰っても生活できるのか、奴隷になるのか、等々皆不安な気が満ち溢れていた。アメリカ軍が進駐して来て武装解除となり、九月七日除隊となった。

そのまま兵舎にいたが、母や弟のことが心配で仕方

がなかったが、日本に帰っても生きて行けるかどうか  
わからないので、釜山鉄道局に再就職のため願ひ出た  
が、全員朝鮮人で鉄道を運行するので日本人は必要な  
いといわれ、敗戦国の悲哀を味わった。

しかし、米軍の私達に対する対応はきわめて良く、  
衣食住をはじめ生命の危険はなかった。

昭和二十年十二月二十五日、引揚船で帰国したが、  
それからの生活再建には、本当に苦勞の連続でした。

郡山市も爆撃にあい、荒涼たる状態であったが、母  
や弟も間もなく帰国出来たが、一家をあげて朝鮮に渡  
り、長い年月が過ぎたので、故郷には住む家もなく、  
その日の食事にも事欠く有様でした。親類の物置きを  
借り、仮住まいとした。

同じような境遇にあった元大陸の鉄道員の人達が集  
まり、なんとか生活の道を見出そうと話しあい、大陸  
鉄道従事員援護会を結成し、授産所で竹細工の仕事  
をすることになった。満鉄や華北、華鉄鉄道で駅長や相  
当な地位になった人達十四、五人が、なりふりかまわ  
ず生きるため、朝早くから夜遅くまで身を粉にして働

いた。

食糧もなく、食うものも腹一杯食べられず、皆の弁  
当は、トウフの「おから」であった。

製品は「パイスケ」という石炭を運搬する籠を作る  
仕事で、一人一個作れば手間賃いくらの請負制度でし  
たが、これが売れないにはホトホト困ってしまった。  
私達は元鉄道員の関係から、国鉄の各駅に行き、三押  
九押し窮状を訴え、少しでも買ってもらおうよう走り廻  
った。また市内の日東紡績や中小の事業所をなんの縁  
故もなく訪問し、事情説明に汗を流し、一個でも買っ  
てもらおうよう努力したが、成果はあまりあがらなかつ  
た。

市内を一巡し、終れば、市場開拓をしなければなら  
ず、各人、中国時代の伝手を探し、青森、秋田、山形  
県などに連絡し、なんとか販路を見つけようとした。  
東京にも依頼したが、ほとんど売れなかった。

「武士の商法」で経営が行き詰まった時、小野町の  
大金商店の主人が私達の苦境に同情し、全面協力を申  
し出てくれた。商売の「コツ」をいろいろと教えても

らい、戦後三年、世情も安定し、それぞれの自立の道を探すことになった。私は母と同居し、なんとか、アバラ屋であったが一軒屋を借り、結婚することになった。

戦災孤児の女性で、私も同情した結果であったが、年令は三十歳をとうに越していた。

私は鉄道員と軍隊生活しか経験がなく、当時国鉄にはなかなか入られなかったので、警察予備隊が出来たので、なんのタメライもなく応募した。後に自衛隊となり、勤続二十数年におよんだ。定年退職してから、生命保険の外交員をしたが、妻が昭和六十年死亡してからは気力も衰え、最近では体調も思わしくなく、息子や孫に助けってもらっている状況である。

幼くして朝鮮に渡り、兵役、敗戦、引揚げ、その後の生活苦と気がついたら三十路を過ぎ、私の青春は無いも同然であった。今年に入り長期入院二回に及び、人生の峠を越した感慨にふける日も多く、私の人生は暗い道程であったと思われるのではない。あのいまわしい戦争さえなかったら、また違った人生があったと思

う。

この世から戦争をなくしたい。しかし人間のあくなき欲望は無くすることは出来ないだろう。今でも世界各地で戦争がくり返され、人が殺され、物がこわされているのを見るとき、戦争体験者として、悲しさとむなしさが胸にこみあげて来てならない。

## 八月十五日終戦の日、父が重傷

鳥取県 井田 明子

昭和二十年八月十五日は私の人生にとって目の前が真暗闇に包まれた忘れられない日となり深い悲しみに沈んだ日でありました。

私の生れ育った今の北朝鮮の元山、ここは日本の陸海軍の要所、父は要塞司令部に勤め八月十五日乗船中機雷で爆破され、危うく一命はとり止めたものの一生松葉杖にすがって歩かなくてはならない人となりました。